

お地蔵さま、お不動さま、お薬師さま、お釈迦さまのように、前後に「お」と「さま」をつけた「ほとけさま」は、日本人の心に深く馴染んだため、元がインドの尊格だったことは忘れられがちである。このことは、文殊・弥勒・普賢・虚空蔵・勢至といった菩薩や、大日・阿闍・宝生などの如来と比べてみるとよくわかる。お地蔵さまのような言い方は、お日さま、お月さま、お星さま、お蔭さま同様、漢語ではなく和語として定着したこと証しでもある。「お」は原則として和語に冠する尊敬語だからである。日本で人気があるがなかった例外は、観音菩薩と阿弥陀如来の二尊ぐ

大地の菩薩

国際教養大学特任教授 金岡秀郎

地蔵尊の宗教 ②

らいであろう。

これほど日本語化したお地蔵さまという名称も、起源をさかのぼっていくとインド古代のサンスクリット語のクシッテイ・ガルバにたどり着く。クシッテイは大地を、ガルバは子宮のようになかを包み込むものを表し、これが漢語に訳されて大地の功德を持つものを意味する地蔵の訳語ができた。地蔵は一説にインドの大地母神プリティヴィーが仏教に取り入れられたとされるが、仏教では菩薩として現れる。初期の仏教において菩薩とは、修行時代の釈尊のように仏になるために精進するものをいいた。大乘仏教の時代になると、菩薩は仏になる資質がありなが

ら、衆生を救うためこの世に留まっていたものを指すようになり、多くの菩薩が現れた。インドにおける多くの菩薩のなかでも弥勒は早くに出現し、ガンダーラ彫刻の時代にすでに作られている。文殊・普賢・観音も初期大乘経典には登場し、弥勒とともに四大菩薩と並び称された。一方、地蔵菩薩が出現するのは遅く、中期、後期の大乘経典にいたったのである。像としての地蔵もインドで単独の作例は見つかっておらず、七世紀末ごろのエローラ十二窟や、八・九世紀のオリッサのラリタギリ遺跡で八大菩薩の一尊として出土した程度である(田中公明『仏教図像学』)。インド仏教を受け継いだチベット仏教においても、地蔵菩薩は八大菩薩の一尊として尊崇されるのが一般的で、地蔵菩薩が単独で造立されることはまれだった(同『チベットの仏たち』)。このことは地蔵

尊が単独で篤く尊崇される日本との大きな違いである。しかもインドやチベットの地蔵像は菩薩形で、中国や日本で見られる頭を丸め錫杖を手にした僧形とは大きく異なっている。地蔵尊が僧形となった根拠は、その功德を説いた『地蔵十輪経』「序品」に「地蔵真大士(中略)声聞の色相を現わし(中略)出家の威儀を現わす」とあることによる。声聞とは仏弟子のことで、比丘すなわち僧侶である。出家の威儀とは僧侶の持



菩薩の姿であるインドの地蔵尊
©1985 Benoytosh Bhattacharyya
『The Indian Buddhist Iconography』

ち物や身なりをいう。僧侶姿の地蔵尊は他の菩薩に比べてはるかに人々に近く、日本で高い人気を得た原因にもなった。『地蔵十輪経』には「衆生が大地の種子・樹・山や嫁穡(収穫)などに依止する頼りとする」ように、地蔵にも同様の功德がある」と説かれ、『地蔵本願経』には大地の生み出す草木・沙石や稲や麻や米などは、みな地蔵尊の力によるととされている。地蔵尊とは、大地の恵み、有り難さが具現化して菩薩となったものである。

おはなし散歩道

子だぬきとばあさん

八王子市 池田 美絵

「エイ、エイ、エイー!」「うーん、うーん、うーん」和尚さんは、ばあさんが三日三晩苦しがつているので、九字を切つて早く楽にしてあげようと懸命だった。だが、一向に効きめがない。いよいよ、村の若い衆を集めて加勢させたが、ばあさんは顔を真っ赤にして苦しがる。「もうだめだ!」

ばあさんは突然、一声叫ぶと、大きなゲップとともに口から丸い固まりを吐きだした。

ゴロゴロ、ゴロ……。床にころがったものを見て、和尚さんは我が目を疑った。なんと、ばあさんの口から飛び出したのは一匹の子だぬきだった。

「ばあさんや、たぬきを食ったんか?」

和尚さんが尋ねると、ばあさんは、イヤイヤと

首を横に振る。三日前、釜の上にまんじゅうが一つ置いてあったので、それを食ったという。村の誰かがくれたものだと思った。ふだんから正直者のばあさんだからウソはつくまい。和尚さんは、今度は子だぬきに問う。

「ほんなら、まんじゅうに化けておったんか!」

すると、子だぬきは済まなそうにうなずいた。「こうなつたいきさつを説明してみなさい」

和尚さんに言われて、子だぬきは小さな声で話し始めた。

十日前のこと。子だぬきは獵師が仕掛けたウサギ獲りのワナにはまり、身動きがとれずにいた。そうしたところ、偶然通りかかったこのばあさんに助けられたというのだ。「そうだわ、子どものため

きが罠に嵌まっていたんだわ!」

ばあさんはさつきまで苦しめられていたことなど忘れて手を打った。「それで、それでお礼がしたくてちゃんちゃんこに化けようとしたの……」

子だぬきがいうのを聞いて、和尚さんは首をかきしげる。なぜまんじゅうなのだ。

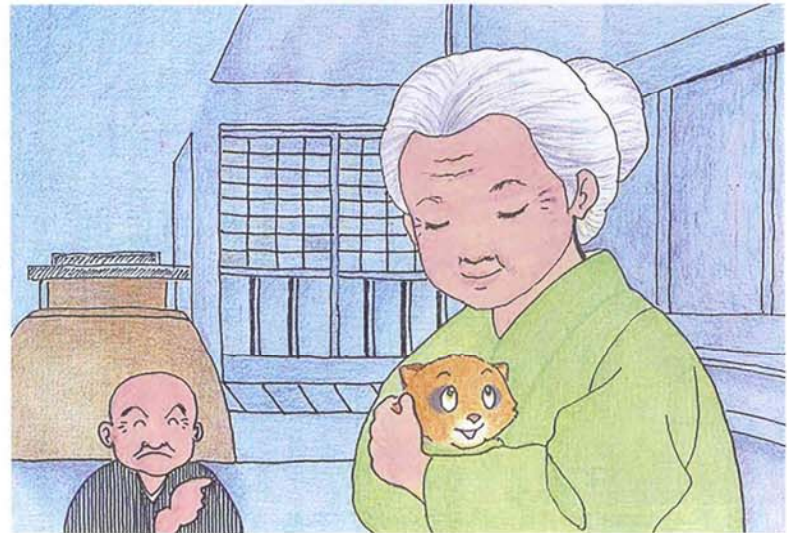
「友達のたー坊に呪文を教えてもらったの」

和尚さんはくすつと笑った。

「おまえさん、だまされたな。あいつはいたずら者じゃよ。でも、ばあさんに恩を返そうなんて見上げた根性だぞ」

「ごめんなさい。もう山へ帰ります」

べこりと頭を下げて詫言る子だぬきを見て、ばあさんは、急に愛おしい気持ちかわいてきた。「お前さえよかつたら、冬のあいだ、わしの家で過ごしてくれんかのう。あばら家だからすきま風で寒いんじや」



一人で暮らすばあさんは、このまま子だぬきと別れてしまふのが辛く思えた。「いい考えじや」

和尚さんに促されて、子だぬきはここんとうなずいた。ばあさんは手を

たたいて喜んだ。その晩から子だぬきは、ばあさんのふとんにもぐりこんで一緒に眠った。おかげで温かな冬を過ごしたとき。

(さし絵・小出 茂)